
求道

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
求道

【Nコード】
N1396I

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
渡辺凌駕は剣の道を窮めんとしていた。その彼が遂に至ったその領域とは。中島敦の『名人伝』や列子似合ったお話がヒントになっています。

第一章

求道

渡辺凌駕はかなり変わった男であった。何が変わっているかという戦争が終わってから随分と経つのにまだ武がどうか言っていたのである。

「やっぱり人間武芸なんだよ」

いつもこう言っていた。彼の家は大きな剣道の道場でありそこを継ぐことになっていた。だから剣の道を志すのはいいことだがそれでも随分と変わっていた。

「今時剣道を極めるのか？」

「スポーツじゃなくてか？」

「剣道は武道なんだよ」

彼の口癖であった。温和な顔立ちをしていて目は細いがいつも目が笑っている。背は高く武道をやっているだけあって引き締まった身体をしており黒い髪が少し立っている。その彼の言葉である。

「剣道は。だからさ」

「それを窮めるっていうのかよ」

「そうさ。俺は剣道家なんだよ」

あくまでこう言う。

「だからやるんだよ。剣の道をな」

「今時何言ってるんだよ、全く」

「今は銃があるんだぜ、銃」

周りは彼のそんな言葉をいつも笑うのだった。

「それで剣道なんてよ。スポーツじゃなくて武道でなんて」

「何言ってるんだよ」

「けれど俺はなってみせるんだ」

しかし彼の考えは変わらない。

「絶対にな。なってるからな」

「まあ好きにしな」

「なりたかったらな」

そして周りは呆れて最後にはこう言う。これがいつものことだった。

凌駕は毎日二千本は素振りし走り筋トレをして身体を鍛えた。当然部活も剣道部だ。中学も高校もそれで全国大会に出て優勝した。それで大学にも入った。

大学でも相変わらずで剣道部で活躍続けた。一年の頃から頭角を現わし忽ちのうちに高校までと同じく全国区の人間になった。世界の剣道大会にも出たし段もすぐに四段になった。しかし彼はそんなことはどうでもよかったのだった。

「まだ俺は剣道を窮めてはいないんだ」

こう考えているのだった。

「まだ。だから」

「おい、大学の選手権で優勝してもか？」

「まだか？」

皆はそれを聞いてまた呆れてしまった。

「まだ先があるのかよ」

「御前の言う先って何なんだ？」

「実はそれは俺にもわからないんだ」

こう問われると彼も答えられないのだった。

「ちょっと。それは」

「わからないって何だよ」

「それでも目指してるのかよ」

「ああ、何かをさ」

こう答えるだけであった。

「剣道の終わりにあるものをさ」

「終わりに何があるかか」

「そういえば御前は剣道を窮めたいんだったな」

「そうさ。幸い家は剣道の道場だしな」

生活をするにはそこを継げばいい。実に有り難いことだ。

「ずっとやってくさ。このままな」

「で、御前の家ちゃんとした流派だったよな」

「ああ」

実は由緒正しい流派でもあるのだ。

「そっちの方はどうなんだよ」

「この前やっと免許皆伝貰ったんだよ」

このことも皆に話すのだった。

「それがどうかした？それで」

「いや、免許皆伝だったらな」

「そうだよな。もうな」

「究めたじゃないか」

「もうそれでいいんじゃないのか？」

皆時代劇や小説等からであるが免許皆伝の意味はわかっていた。

日本人ならば誰でもわかることである。

「それ貰ったんならな」

「もう究めたんじゃないのか？」

「世界大会でも優勝したしな」

「いや、まだだ」

しかしそれでまだ辿り着いたとは思っていないのであった。彼は。

「まだなんだよ。全然駄目なんだよ」

「じゃあ何処までいけばいいんだよ、本当に」

「免許皆伝でも世界大会で優勝しても駄目ならな」

「それはまだ本当に俺にもわからないけれど」

「何だよ、まだわからないのかよ」

「ああ。それでもな」

しかし彼は言うのだった。

第二章

「とりあえず。剣の修行は続けるさ」

「それはか」

「ああ、続ける」

それは変わりが無いというのである。

「絶対にな。とりあえずは」

「何をするんだ？それで」

「大学卒業したら家の道場継ぐんだろう？」

「親父はまだ健在なんだよ」

しかしここでこう皆に答えるのだった。

「ピンピンしてるさ。背筋も伸びててな」

「何だよ、じゃあまだ継がなくていいのかよ」

「それじゃあ」

「修行に出るつもりなんだよ」

そしてこう述べるのだった。

「ちよつとな。修行に出るさ」

「修行かよ」

「何でも京都の山奥の方に伝説の剣道家がいるらしいんだよ」

彼は言った。

「その人のところに行ってみるさ」

「そこにかよ」

「ああ、とりあえずな」

こう言うのである。

「行ってみる、京都にな」

こうして彼は京都に向かうことに決めたのだった。大学を卒業してその京都に向かった。京都市を出て舞鶴の方に向かいさらに入っていく。するとそこに古い山寺があった。

深い緑の木々の中に白い石の階段がある。あちこち割れていて端

には苔や草がある。そうした古い年月を感じさせる階段を登っていきそれが終わると。そこに一人の女がいた。

「貴方は？」

「渡辺凌駕です」

その女に答えるのだった。女は長い黒髪を後ろで束ね白い上着と黒い袴という出で立ちであった。切れ長の黒い目はやや狐を思わせるものがあり口元は引き締まっている。細長い顔は白く白狐を思わせる、そんな顔立ちをした凜とした美しさを持つ女であった。

「渡辺凌駕殿か」

「はい」

「話は聞いている」

女は答えるのだった。

「何でも剣道の世界大会で優勝したそうだな」

「はい」

その問いにまずは何も見せずに頷いた。

「それで御存知なのですか」

「若いながらもかなりの剣の腕と聞いているが」

「いえ、まだです」

しかし彼はここで言うのだった。

「それはまだです」

「まだと申されるのか」

「はい。私は剣の道を極めたいと思っているのですが、
こう女に語るのであった。

「その為にはまだまだ修行が必要と思い」

「どうされると」

「ここに参ったわけです」

「この山寺にか」

「聞いた話によるとここに優れた剣術家がいるとか」
伝え聞いた話をそのまま語るのだった。

「それで参りました」

「優れた剣術家か」

「御存知ですか？」

「さてな。聞いたこともない」

女は素っ気無く彼に言葉を返した。

「だが。この山寺には道場がある」

「あるのですか」

「そうだ。貴殿は剣道をしにこの山寺に参ったのであろう？」

「はい」

女の問いにはっきりとした調子で頷いたのだった。

「その通りです」

「ならばだ。剣道をするがいい」

そしてこうも告げるのだった。

「まずはな。相手もいる」

「相手もですか」

「そうだ、私だ」

次に出した言葉はこれであった。

「私が相手をする。それでよいか」

「というたまさか」

彼は女の今の言葉でわかったのだった。その伝説の剣術家とは誰なのかを。それでそのことを女に対して問わずにはいられなかった。

「貴女が」

「それでどうするのだ？」

しかし女は答えてはこなかった。

「剣を交えるのか？どうするのか？」

「御願います」

彼の返答はこれしかなかった。

第三章

「是非共」

「そうか。剣を握るか」

「その為に来ましたので」

そしてまた答えるのだった。

「ですから。御願います」

「わかった。それでは参られよ」

女の言葉は強いが礼儀正しいものであった。

「道場にな」

「はい、それでは」

「こちらだ」

言うど踵を返した。そうして山寺の右手に向かう。

山寺もまた古く歴史を思わせるものがあつた。そしてかなり大きくもあつた。

道場もまた同じであつた。凌駕のいる街でもここまで大きな、しかも古い道場はなかつた。彼はその古い大きな道場に案内されたのである。

「まずは着替えられよ」

「あつ、はい」

「防具も竹刀もあるな」

「こちらに」

その肩に担いでいるものを見せる。黒革の竹刀袋と道具袋だ。それをここで見せたのだ。

「ありますので」

「では暫くしてから私もここに戻る」

その間に着替えよというのであつた。

「それではな」

「はい、お待ちしています」

すぐに着替え防具や竹刀を出す。着替えた服は防具袋の中に入れた。そうしてそのうえで防具や竹刀を置きその防具の後ろに正座している。程なくして女が戻ってきたのであった。

「待たせたか」

「いえ」

こう女に返した。

「今仕度を終えたところです」

「それは何よりだ」

見れば彼女は上は白で下は黒の道着だ。それは先程と同じだ。しかし決定的な違いがあった。右の脇に防具を、左手に竹刀を持っていた。完全に剣道の構えだった。

「それでは。早速剣道をするか」

「はい、それでは」

「そういえばだ」

女は彼の前に座り向かい合ったうえでまた言ってきた。

「まだ私の名前を言っていないかったな」

「そうでしたね」

凌駕も彼女の言葉に答えた。

「貴女のお名前は。何といたのですか」

「渡辺言葉という」

「渡辺言葉さんですか」

「そうだ。それが私の名前だ」

こう名乗るのだった。

「それがな」

「それが貴女のお名前ですね」

「その通りだ。そしてこの山寺で修行している身だ」

今度はこう語ってきた。彼と向かい合い正座したまま。既に防具はその前に、竹刀は左に置き手拭は面の上にかけてある。それは凌駕と全く同じであった。

「ここだな」

「そうでしたか」

「大学を卒業して暫くになるが
彼女はまた言ってきた。

「その時からここで修行をしている」

「という住み込みですね」

「貴殿のことは知っている」

またこのことを話してきた。

「それはな」

「そうですか。では」

「私も同じだ」

今度の言葉はこうであった。

「家は剣道の道場をしている」

「道場をですか」

「京都の方でだ。市内で今は父上と兄上がやっておられる」

「そうですか。本当に同じですね」

彼女の言葉に凌駕も頷いた。

「それは」

「同じだ。私もまた剣に生きることを決めている」

このことも同じなのだった。そしてこの話をしているうちにだった。彼もまた言うのだった。その話を聞きながらであった。

第四章

「それでは京都の山奥にいる伝説の剣道家とは」

「私はそうではない」

だが彼女はそれは否定するのだった。

「それはな。私ではない」

「ではそれは一体誰ですか？」

「今は言うことができない」

しかも言おうともしなかった。取り付く島もないといった感じだった。

「残念だがな」

「そうなのですか」

「しかし。手合わせすることはできる
こう話すのだった。

「手合わせはな」

「はい、それでは」

「手合わせだ」

言いながら礼をしてからそれぞれ防具を着けそうしてそのうえで手合わせに入る。まず構えを取って凌駕は。その言葉の腕がわかったのだった。

「これは」

彼女はただ中段の構えを取っているだけだ。ただそれだけだ。白い防具が如何にも女性らしい。しかしそこから放たれる気は彼よりも上であった。

「どうした？ 打って来ないのか？」

彼女の方から言ってきたのだった。

「遠慮はいらないぞ。来るがいい」

「くっ……」

凌駕もまた中段である。しかしどうしても攻めることはできな

った。そうしてそのまま迂闊に攻めることはできなかった。どうしてもだった。

「攻められない、これは」

「攻めないならばだ」

言葉の方から言ってきたのだった。

「こちらから行くぞ」

「来た!？」

その動きは見えなかった。一瞬だった。彼は面を取られていた。気付いた時には言葉はもう彼の後ろを通り抜けていたのであった。

「何っ……」

「一本だな」

通り抜けていた言葉が振り向いて答えてきたのだった。奇麗な面を決めた後での言葉だった。

「これでな」

「馬鹿な、見えなかった」

「一本は一本だ」

また言う言葉だった。

「そうだな」

「はい」

「驚いているな」

今度はこう言ってきた言葉だった。

「私に一本取られて」

「その通りです」

凌駕は項垂れた声でそれを認めるのだった。

「まさか。こんな」

「貴殿は確かに強い」

彼女もそれは認めた。

「そして修行を積んできたな」

「そのつもりです」

謙遜しながら述べる凌駕だった。

「それは」

「構えてわかる。貴殿の腕はやはり世界を制したただけはある」
こうも話すのだった。

「しかし私はより修行を積んできたのだ」

「よりですか」

「そうだ。私はより多くの修行を積んできた」

言葉は己の言葉を続ける。

「貴殿よりな」

「それで俺を」

「どうだ？ 剣の道をより進みたいか？」

また構えを取ってきて凌駕に問うてきたのだった。

「ならばだ。私と共にこの山寺で修行を積むことだ」

「剣の道を」

この言葉はそのまま彼の心の中に残ったのだった。何故ならそこそが彼がいつも考えていることだからだ。だからこそ残るのであった。

「どうするのだ？ それで」

「俺は」

凌駕もまだ構えていた。しかしその声には明らかにまだ思うところがあった。しかしそれでも言うのだった。

「俺は。剣を窮めたいです」

「その言葉偽りはないな」

「はい」

明らかな声になっていた。

第五章

「その為にここに来ましたから」

「それではだ」

言葉は彼のその言葉を聞いて。また言ってきた。

「私はその相手をしよう」

「修行のですか」

「まさか一人で修行するつもりだったのか？」

真顔で凌駕に対して問うてきた。その表情は面の中からもはつきりわかる程強いものであった。そしてそれは言葉にも出ていた。彼女の言葉に。

「一人で」

「それは」

「一人で修行するのもいい」

彼女もそれはいいと言うのだった。

「しかしだ。一人よりも二人だ」

「二人ですか」

「そうだ。剣は一本より二本あった方がいい」

言葉は次にこう彼に述べた。

「二本あった方がな」

「ではそれでは」

「そうだ。二本だ」

凌駕にまた二本と言ってみせてきたのだ。

「二本だ。その二本の剣で修行しようぞ」

「私と貴女ですか」

「剣を目指すのは私とて同じだ」

それは凌駕だけではない。言葉も同じだというのだ。静かだが強い言葉で。

「私とてな」

「ですが貴女は」

自分よりも遥かに強いと言おうとする。しかしそれより前に彼女の言葉が来たのだった。完全に彼の機先を制するものであった。それを言うのだった。

「見誤っては困る」

「見誤るとは？」

「貴殿は強い」

凌駕に対する言葉だった。

「かなりな。私との強さの違いはまさに紙一重だ」

「いえ、そのようなことは」

「事実だ」

彼に対してそれでも告げるのだった。

「紙一重の差がここまで出るのですか」

「その通りだ。私も同じだ」

またあらためて彼に告げた言葉だ。

「共にだ。剣の道を極めようぞ」

「はい、それでは」

「究め極めさらに窮める」

言葉の表現は同じだが意味は違っていた。

「まずは極めそこから窮めに向かおうぞ」

「はい、二人で」

こうして二人は静かな山寺において修行に入った。二人で剣を交える日々が続き共に深い山の中で修行を続けた。その結果彼等はさらに強くなった。

剣の道を極めていく。そしてやがて凌駕はある日。勝負の場において言葉から見事な一本を取ったのだった。突きがその喉に突き刺さった。

「入ったな」

「はい」

誰がどう見ても一本だった。その突きは鮮やかなまでに言葉の喉

に突き刺さった。

「私から遂に一本だ」

「私は遂に」

「どうやら私を超えたようだ」

そして言葉は次に彼にこう告げた。

「私をな」

「貴女をなのですね」

「剣を極めた」

そしてこうも告げるのだった。

「遂にな」

「極めたのですか」

「しかし極めたただけだ」

だがこうも彼に言うのだった。極めたただけだと。

「まだ道は果てしないぞ。わかっているな」

「はい」

静かな調子で彼女の言葉に頷くのだった。

「それはもう」

「窮めよ」

次に出した言葉はこれであった。

第六章

「次は窮めるのだ。わかっているな」
「無論です」

そしてそれに応えて頷く凌駕だった。顔つきはここに来た時よりもさらに引き締まっていた。それはまさに極めた男の顔であった。

「私もまた窮める」

「貴女もなのですね」

「そうだ。だからこそ案内したい」

彼に言う言葉が変わってきた。微妙にはあるが。

「然るべき場所にな」

「まさかそこそが」

「そうだ。そこだ」

言葉の言葉もまた凌駕がはじめて出会った頃とは違うものになっていた。やはり引き締まり鋭いものになっている。それもまた極めた者の顔であった。

「そこに案内しよう。そして共に」

「剣を窮めるのですね」

「その通りだ。そこにあの方がおられる」

話がまた変わった。

「あの方がな」

「といいますとあの」

「そうだ、あの方だ」

凌駕の言葉に答える形になっていた。

「あの方がおられる。私の祖父の師匠であられた方だ」

「言葉さんの祖父殿の」

「そうだ。そこに行こう」

また彼を誘うのだった。

「そこでだ。剣を窮めようぞ」

「はい、それでは」

こうして二人は今までいた山寺に別れを告げ別の場所に向かった。そこは霊峰とさえ呼ばれる山であり緑は深く人が入った形跡もない。二人はその奥に入って行きそうして。その頂上に辿り着いたのだった。

そこには小さな一軒家があるだけだった。いるのは小柄で物静かな老人だけだ。穏やかな顔をしていても剣を握るようには見えなかった。その彼が切り株の上で静かに座禅を組んでいた。

「誰か来たのう」

二人が老人の前に来るとすぐに呟いてきた。

「しかも剣を使う者達か」

「おわかりなのですか」

「もう」

「わかるとも」

こう言葉と凌駕に述べてきた。その声も実に落ち着いたものであった。

「気が言うておるわ」

「気がですか」

「その通りじゃ。まだ気が刺々しい」

今度はこう二人に話すのだった。それと共に目を開けてきた。目の光も実に穏やかだ。その目で二人を見ての言葉であった。

「極めはしたが窮めてはおらんか」

「窮めてか」

「極めてもまだ道がある」

老人はこう二人に言うのだった。

「まだな。それが窮めるといふことじゃよ」

「はい、ですから」

「我々はここに来ました」

二人は老人の前に跪き言ってきた。

「ですからどうか」

「私達に剣を教えて下さい」

「それではじゃ」

ここで老人は二人に対して穏やかに言うのだった。

「剣を出してみよ」

「剣をですか」

「それからじゃ。振ってみるがよい」

こう二人に告げる。

「よいな。まずは素振りじゃ」

「はい、それでは」

「すぐに」

二人は老人の言葉に応えそのうえで剣を出した。そうしてその剣を手に持ったうえでそれぞれ老人の前で素振りをしてみせたのである。

老人はその素振りを静かに見ていた。そして素振りを見た上で言った。

「そうじゃな。よい」

「そうですか。よいですね」

「私達の素振りは」

「二人共極めている」

また極めるというのだった。

「じゃがやはりまだ窮めてはおらん」

「はい、それは」

「申し訳ありません」

「謝ることはない。剣を持たずして斬る剣道ではまだないな」

「剣を持たずに!？」

「斬る!？」

これは凌駕にも言葉にも思いも寄らない言葉だった。二人はその言葉を聞いて思わず目を丸くさせた。そうしてすぐに老人に問うのだった。

第七章

「それは何ですか!？」

「剣を持たずに斬るとは」

「見るがよい」

老人はここで自分の前に薪を置いた。火に使う薪のうちの一本だ。それを出してきたのである。

「この薪をこのまま斬れるか？」

「このままですか」

「剣を持たずに」

「そうじゃ。一日中剣を持っていたても剣道を窮めることはできない」
老人は構えさえ取ってはいない。そうしてそのうえで言葉を続けるのだった。

「こうするのじゃ」

「あっ!？」

「何と!？」

二人はここで信じられないものを観た。何と老人が少し見ただけでその薪が縦から真っ二つになったのだ。まさに剣で両断されたように。

「斬れたとは」

「何もせずとは」

「これが窮めると言うことじゃよ」

老人の言葉は相変わらず穏やかなものだった。

「では二人共よいな」

「はい」

「御願います」

それを見た二人にもう迷いはなかった。

「その剣を窮めると言うことを」

「教えて下さい」

こうして二人は老人に師事した。そうして遂に。彼等は何もせずとも目の前にあるものを斬るようになった。剣を抜かず構えずそれを見ただけでだ。

二人がそれができるようになった朝に。老人はまたしても穏やかな声で二人に告げた。

「見事じゃ」

「ではこれでよいのですね」

「これで」

「そうじゃ。御主達は剣道を窮めたのじゃ」

こう二人に話すのだった。

「しかしじゃ。わかっておるな」

「はい、それは」

「無論です」

二人は老人の言いたいことははっきりとわかっていた。まさに言わずともだった。

「道はまだあります」

「これで終わりではありません」

「その通りじゃ。剣の道は終わりが無い」

老人は二人に言うのだった。

「まだはじまったばかりじゃ」

「その通りです」

「窮めてそしてようやく」

「御主達は今それがわかった」

老人はまた二人に告げた。

「さあ、歩いていくがいい。これからもな」

「はい、それでは」

「今より」

凌駕と言葉は老人に別れを告げ山を下りた。その時の二人にはかつての鋭さはなくまさに全てを達観したものがあつた。彼等は程なく結婚し凌駕の道場を継いだ。だが必要な時以外には剣を持たず普

段はあくまで抜こうとしない。まるで剣道なぞ知らないかのように。そんな彼等を見て人々はいぶかしむ。そうして口々に問うのだった。

「何故剣を抜かれないんですか？」

「そうです。何故ですか」

「抜く必要がないからです」

「だからです」

しかし二人はそんな世間の声にこう答えるだけだった。

「何故ならです。動作の窮みはです」

「窮みは？」

「一体何ですか？」

凌駕のその言葉に対して問うのだった。

「不動」

「言葉の窮みは無言ですね」

そして言葉も言うのだった。

「だからこそです」

「不動に無言？」

「それは一体」

人々がその言葉の意味をわかりかねているとだった。凌駕はさらに言うのだった。

「剣道の窮みは無刀です」

「無刀が窮みとは！？」

「意味がわからないのですが」

「こういうことです」

彼はここで目の前にあるものを投げた。それは一枚の布だった。

彼は剣を持っていないし抜いても構えてもいない。ただそのひらひらと宙に舞う布を見ているだけであった。

しかし彼は目を一瞥させたそれだけで。布は二つに切れてしまった。それがどうしてなのか、見た者でわからなかった者はいなかった。

「何と、それでは」

「窮めるといのは」

「はい、何を持たないでもこうして斬ることができる」

凌駕は静かに答えた。

「これなのです」

「そうですか。剣を持たずとも斬る」

「そういうことですか」

皆凌駕の今の動きと言葉で納得したのだった。剣を持たずとも斬ることができる、それこそが窮めるといふことなのだ。今わかったのだった。凌駕も言葉もこの世に並ぶ者のない剣道家と謳われるようになった。しかし二人はこのことに一切何も言わなかった。そしてそれは死ぬまで変わらなかった。これが道を窮めるといふことだろうか。

求道 完

2009・6・10

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1396i/>

求道

2010年10月8日15時27分発行